

Newsletter

2021.11.19

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

2021年度全学共通科目の授業実施について

●春学期の授業実施報告

4月10日に開始した春学期は、本学の活動制限指針に基づき制限レベル1で開始しましたが、同月下旬に緊急事態宣言の発令に伴い、制限レベル3に変更となりました。その後、宣言の解除を受け、6月下旬に制限レベル2に引き下げられたものの、緊急事態宣言の再発令に伴い7月中旬には再び制限レベル3に引き上げられました。

以上のように、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況の影響により授業形態が二転三転し、慌ただしくなったにもかかわらず、先生方の多大なるご協力のもと無事に春学期を終えることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

●秋学期の授業実施方針（2021年10月25日現在）

9月20日に開始した秋学期は、緊急事態宣言の延長により、制限レベル3で開始しましたが、宣言の解除を受け、10月上旬には制限レベル2に、さらにその後、感染者数の減少に伴い、10月中旬には制限レベル1に引き下げとなり、10月18日から対面授業が再開となりました。未だ新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の収束が見えず大変な状況が続きますが、春学期に引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

秋学期のレベル別授業形態（簡易版）※詳細は立教大学教務部HPをご覧ください。

https://spirit.rikkyo.ac.jp/academic_affairs/common/SitePages/stuinfo22.aspx#sf22-01

制限レベル	総合系科目	言語系科目
1	「学びの精神」 ：対面 「多彩な学び」 講義系科目：オンライン／オンデマンド 演習・実習・スポーツ実習：対面	言語A ディベート、プレゼンテーション、自由科目：対面 リーディング＆ライティング：オンライン 上級英語：週1回対面、週1回オンライン 言語B 必修科目：対面 自由科目：対面またはオンライン
2	「学びの精神」 ：ミックス型対応による対面、 オンライン／オンデマンド 「多彩な学び」 講義系科目：原則オンライン／オンデマンド 演習・実習科目：オンライン／オンデマンド、 ミックス型対応による対面 スポーツ実習：十分な感染防止策を講じた上 で対面実施	言語A・B ：原則オンライン ※一部自由科目については、ミックス型対応に よる対面で実施
3	すべてオンライン／オンデマンド	すべてオンライン

目次

2021年度全学共通科目の授業実施について	1
コロナ禍でのオンライン海外研修プログラム紹介 ― 国内実践グローバルインターンシップ ―	2
― 朝鮮語海外言語文化研修 ―	4
授業探訪 ― 「SDGs×AI×経済×法」 ―	6
2021年度全学共通カリキュラム運営センター名簿	8

コロナ禍でのオンライン海外研修プログラム紹介 —「国内実践グローバルインターンシップ」—

“国内” から挑む “グローバル” インターンシップ

岩井 理矢子（国際化推進機構／グローバル教育センター課員）

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）蔓延以前の2019年、グローバル教育センターの海外インターンシップ担当の間では、国内から参加するタイプの海外企業インターンシップの中には海外渡航型に引けを取らない高いレベルの経験を積んでいるケースもあることが話題になっていた。私たちは学生にとって利点多きこうした経験を海外インターンシップ科目として認められる仕組みを作れたら、と理想を描いていた。しかし当時、国内での経験が海外プログラムの正課科目として認められるのは非常にハードルが高かったように思う。理想を抱きつつも、いつかできるだろうか、と漠然と考えていた。

流れというものはある。2020年3月、COVID-19の影響がこんなにも世界で広く長期に亘って続くことをつゆとも想像できていなかった頃、渡航型海外インターンシップでお世話になっていた一つの企業より、オンライン海外インターンシップの可能性について打診を受けた。COVID-19によって渡航できないから仕方なく、という理由ではなく、学生が海外インターンシップを経験して帰国した後、その学びを活かし続ける場所をつくることができれば経験の幅を広げてあげられるのではないかという前向きな話であった。夏の海外インターンシップ実施は難しそうだと雰囲気広がる中、我々の抱いていた願いと企業からの提案が重なり、まずはパイロット的にオンライン海外インターンシップを実施してみようということになった。当該企業への海外インターンシップ経験者のみを対象としたこともあり、その年の6月から11月にかけて2件のパイロットプログラムが順調に執り行われた。

次に正課科目運用を見据えて12月～2021年2月に行ったパイロットプログラムは、募集企業を4社に増やし全学生を対象として参加者募集を行った。50名を超える学生から応募があり、海外渡航が難しい状況下においても学生から海外プログラムを求められているという熱を感じた。この時の参加者は当該企業でのインターンシップ経験は初めてだったが、リアクションも上々のうちに終結することができ、いよいよ2021年度からの正課科目としての実施準備が整った。当初、正課化まで高い障壁を想定していた国内からの海外インターンシッププログラムは、想像とは裏腹に自然な流れでグローバル教育センターが提供する学びに組み込まれていった。

2021年度より正課として開講されたこの科目は、「国内実践グローバルインターンシップ」と名付けられた。「多彩な学び」に分類される1単位科目である。春学期、秋学期ともに授業期間内の2～4か月のうちに参加学生の空き時間で企業側と調整を行い、30時間程度のインターンシップ実習を経験する。実習先はアジア・ヨーロッパ・オセアニア・北米の12の国・地域から13社以上、観光業、航空業、教育業、人材サービス業等複数の業種で受け入れに協力をいただいた。現在のところは渡航型海外インターンシップで既にお世話になっている海外を拠点とした企業が中心である。業務については、オンラインでも学生が取り組める内容ということで、各企業の方々にはかなり試行錯誤していただいた。海外拠点企業が扱う業務の特色の解説、SNS等を活用した情報発信、資料の翻訳、オンラインツールを活用した企画の立案、営業補助、マーケティング調査等がそれぞれの企業で行われた。定期的なミーティングや講話の際にはオンライン会議システムを利用し、一方で課された業務は学生が各自進め、質問や進捗報告はメールやチャット等企業の指定するツールで都度確認するのが基本型となった。設定期間に幅を持たせていることも相まって、ヨーロッパなどの時差が大きい地域でも実習を行うことができた。パイロットの経験を踏まえ、企業側には業務負担が短期に集中しすぎないように配慮もいただいた。

科目の目標は「国内で、海外インターンシップに準ずる業務経験を行うことで、グローバルに活躍する企業の業務の仕組みを理解し、グローバル社会で活躍するために自身に必要な能力に気付くことができる。その上で、

将来的に海外やグローバル社会での活躍につながる一歩とする」としている。今後ますますオンライン化によりボーダーレスが進むグローバル社会での働き方を体得することもできるだろう。企業ごとに実習内容の目標レベル設定が異なるため、初めての海外経験としても、これまでの経験を発展させるための学びとしても対応している。参加学生は科目申込時から個人単位で目標を設定し、実習直前には今一度各自の具体的な目標を整理する。実習中は定期的に振り返りを行い、実習後は事後学習等を経て自身の学びや身に付けたことを確認する。

想像に難くないとおり、本科目では、学生が海外に渡航するからこそ感じる事ができる、海外企業の雰囲気や同僚の働く姿、海外生活などを自身の体感として知ることができない。ゆえに運営上の不安も多々あった。学生がインターン学習に求めているものを提供しきれるか、刺激が少なすぎないか、先方の担当者と場所を同じくしないことでコミュニケーション不足により実習が滞ってしまうケースはないか……。しかし、本実習では確実に「グローバルな環境で業務を行う」経験をすることはできる。我々は、オンライン実習と渡航型実習の経験や学びの違いについて予め参加学生に詳しく伝え、同時にオンライン海外インターンシップ参加における明確な目標設定を促し、積極的な参加姿勢の重要性を強調した。

結果、2021年度春学期の本科目の事後研修では、参加学生は我々の予想を超えて各自が設定した目標を十分に達成できたと評価する者が多かった。加えて、積極性の重要性を改めて認識した、COVID-19影響下を言い訳にせずに行動できた、グローバル人材になりたいという思いを強くした、将来のキャリアに考えをつなげた、海外渡航できる時期であったとしても参加を検討したと思う、などの声があった。世界で活躍するには異なるバックグラウンドを持つ人同士が理解し合うための教養や専門性の高さが必要だと感じ、大学の学びの意味を再認識したという声も印象的であった。オンライン上の各自の発表は要点を的確に踏まえ大変スマートだった。事後研修までの一連の流れを振り返り、科目担当の高井明子グローバル教育センター特任准教授からは、「渡航型のインターンシップと比較し、生活面の経験がない分却って業務面での学び・スキルの獲得（特に遠隔での業務遂行能力）・成長・各自の振り返りが深いと感じた」とのコメントが寄せられ、我々もほっと胸をなでおろした。



2021年度春学期の事後研修より

「国内実践グローバルインターンシップ」は、海外渡航が可能な世の中に戻っても継続していく意義のある科目だと考えている。これまで触れた学び面でのメリットの他、国内から参加できることで、費用面や査証取得、長期間の時間拘束等により海外渡航を見合わせざるを得ない学生にとっても、門戸が開かれているという大きな利点がある。査証取得という側面では、今回も複数名の留学生の参加が叶うなど、履修機会の広がりも見られた。今後は、査証取得において費用・取得期間などの面でハードルが高い、カナダ、アメリカ、ヨーロッパ圏等の国・地域について、オンライン実習の受け入れを打診していくことも大きな意味を持つと考えている。当面は、海外渡航プログラムが本格的に再開できた後、どのくらいの学生がオンライン海外インターンシップを選択するのか、渡航型とのバランスを注視していく必要があるだろう。本科目の成長を皆様にも見守っていただきたい。

コロナ禍でのオンライン海外研修プログラム紹介 —「朝鮮語海外言語文化研修」—

2021年度朝鮮語海外言語文化研修の取り組み

佐々木 正徳（朝鮮語教育研究室主任／外国語教育研究センター教授）

「朝鮮語海外言語文化研修」は春学期、韓国の大学が開講するオンライン語学研修を活用することで、二年ぶりに開講された。隣国への渡航すらままならない日々が続くが、長期休暇を活用して朝鮮語を集中的に学びたいという学生は一定数存在する。次善の策ではあるが、新たな可能性にも期待して研修を実施することを決定した。

○プログラムの概要

「朝鮮語海外言語文化研修」は、学期中に行われる「事前研修」と夏休みに聖公会大学校（大韓民国ソウル特別市）で行われる「語学研修」で構成されている。通常、事前研修では航空券の購入や保険の加入といった事務的な作業をしつつ、韓国の基礎知識や社会状況について学ぶ。今学期は渡航を伴わないため事務的な作業がほとんどなくなり、学習に多くの時間を割けたことは怪我の功名であった。語学研修は、平日毎日4時間程度の朝鮮語の授業を2週間に渡って受講する。従来は聖公会大学校を訪問し受講していたが、今回は自宅等で受講することになる。どのくらいの学生が履修するか不安であったが、21名の学生が履修登録を行ってくれた。

○事前研修のようす

今学期の事前研修は計三回、4月17日、6月5日、7月3日にいずれも対面で行った。初回はオリエンテーション、聖公会大学校の紹介、教員と受講者の自己紹介、朝鮮半島基礎知識クイズを行った。クイズは少々難易度が高かったようで、次年度はもう少し簡単な問題を増やしたい。

二回目は、事前研修の核である大久保地域のフィールドワークである。目的は、いくつかの史跡や現在の街並みに触れることで、多文化地域としての大久保地域の来し方を知り、これからの多文化社会でどう生きていくかを自分なりに考える契機を提供することである。本来はこの経験を経てまもなく韓国に行くため、記憶の新しいうちに現地の文化体験などに参加することになり、更に学びを深めることが可能となっていた。今回はすぐに渡航することは叶わないため、将来、海外に行った際に一歩進んだ文化理解をもたらす素地になることを願っている。学生たちは、この事前研修を通じ、現代的なイメージで捉えていた大久保地域に固有の深い歴史があることを知り、感じることが多かったようであった。



印象に残る場所としてあげた学生の多かった百人町文化通り。奥の看板には日本語とハングル、手前にはHALAL FOODの文字がみえる。香辛料のスーパーや食品の卸しの店、海外送金の店舗もあり、いまの大久保地区を物語っている。



大久保にもある嬌祖廟。ここも発表で触れる学生が多かった。台湾とのかかわりの長さや深さを感じられる場所である。

三回目の事前研修は、フィールドワークでの学びの発表と朝鮮語での自己紹介練習を行った。発表では、いま自分たちが見ている景色が過去の人々の交流の積み重ねで完成されていること、普段から通っている場所であっても知識を持ってみないと見えないものがあること、それらを知ることを怠らずこれからのグローバル社会を生

きていきたいなど、豊かな感想が語られた。朝鮮語での自己紹介は実験的に学生の自己紹介を聞いて、他の学生が質問するという形式をとった。いきなり全体ではなく小グループに分けて行わせるなど、こちらでももう少しマネジメントすべきであったが、一生懸命こなしてくれた。

今回の研修について、受講生に書いてもらった感想を紹介する。

○学生からの感想

<文学部文学科 3 年次 原 萌恵さん>

私が「朝鮮語海外言語文化研修」に参加しようと思ったのは、朝鮮語のコミュニケーション能力を向上させたいと思ったからです。事前研修では、朝鮮語について学ぶだけでなく、大久保地域のフィールドワークなどを通して、日本と韓国の歴史について学びました。約 2 週間の語学研修では、韓国ドラマや歌などを用いて文法学習や会話練習が行われたため、韓国文化を楽しみながら学ぶことができました。聖公会大学校の学生との会話練習では、思っていたよりも自分の朝鮮語が通じることが分かり、自信につながりました。また、作文の課題ではあまり辞書を使わず、自分の知っている単語や文法を用いて取り組んだことで、ライティング力を向上させることができました。さらに、課題は先生からフィードバックが行われるため、自分の弱点を明確にすることができました。今後は、まだ不安の残るライティング力を向上させるために、朝鮮語に触れる機会を多く作り、TOPIK（韓国語能力検定）5 級を取得できるよう努力したいです。

<文学部史学科 3 年次 小林 礼佳さん>

オンラインでの海外言語文化研修の開講は朝鮮語が初の試みであったということで、受講環境や円滑なコミュニケーション等、現地での参加とはまた違った不安や緊張がありましたが、多くの学びを得た貴重な体験となりました。本科目を履修した動機は、自身の朝鮮語の実力を更に向上させたいという思いが強かったためです。コロナ禍においても参加可能な今回のオンライン海外研修プログラムは、上記の目標を達成する上で有意義な挑戦であると感じました。事前学習では、佐々木先生と石坂先生の指導の下、韓国に関する基礎知識や朝鮮半島の歴史・文化を学習した後、多様性の町“新大久保”にてフィールドワークを行いました。語学研修では、語学堂の先生方が学生のレベルと興味関心に沿ったトピックを準備して下さいました。私のクラスは韓国ドラマを字幕なしで視聴出来るようになりたいという学生が多く、いくつかのドラマを教材に、学習した語彙や表現を含む文化学習も行いました。授業後に設けられていた聖公会大学校の学生さんとのコミュニケーションの機会によって、研修前に感じていたスピーキングへの苦手意識を克服する事が出来た点は、今回の研修における大きな成長であったと感じています。本科目での学びを自身の研究テーマや、多様な朝鮮語資格の取得、更なる実力の向上に還元していこうと思います。

○次学期へ向けて～成果と課題～

今回の研修では、異国で実際に生活するという何物にも代え難い機会を提供することはできなかったが、インタラクティブな授業のみならず、現地学生との交流の機会も設けられるなど、多くの試みをしていただいた。また、学生にとっては金銭的、時間的な負担が軽く、生活環境の変化による体調不良も起こりづらいというのは、学習に集中するという面では良かったのではないと思う。

語学研修がオンラインゆえに様々な工夫をしていただいたのと同様に、事前研修においては対面であるからこそできることに留意した。授業当時の感染状況は比較的落ち着いていたとはいえ、対面で行うからにはわざわざキャンパスに来る意味のある授業を提供する必要がある。フィールドワークとその振り返りは最たる例であるが、複数の人間が同じ場所に集まり、誰かが何かを語ることで生じるリアル感を活かすよう心がけた。

対面授業においては、マスク越しである程度距離があるために声が聞き取りづらいという問題があった。しかも、マスクをつけたままでの会話は、自分の声がどの程度相手に聞こえているか判別しづらいため、微調整も難しい。マイクも複数人で使う場合は消毒などに気をつかう必要がある。しかしながら、いつでも発話できるのは対面授業の価値である。次年度の開講形態は未定であるが、今年度の経験を活かし、より良いものを提供していきたい。

授業探訪

2021年度 総合系科目・コラボレーション科目「SDGs×AI×経済×法」

担当：河村 賢治（立教セカンドステージ大学学長補佐／法学部教授）

2021年度春学期に「SDGs×AI×経済×法」という総合系科目を開講しました。学部学生200名、立教セカンドステージ大学（以下、RSSC）受講生20名の授業です。最終回の授業では、4名の学部学生から現在取り組んでいることを報告してもらい、RSSC受講生を交えたグループワークをZoomのブレイクアウトルームで実施しました。報告をしてくれた学部学生（テーマ）は、①コミュニティ福祉学部Kさん（持続可能な社会を実際に取り組む：消滅可能性都市：埼玉県小川町）、②社会学部Nさん（AIとある立教大学生のおはなし）、③経済学部Fさん（欧州グリーンディール）、④異文化コミュニケーション学部Yさん（グリーンマーケティング）です。最終回の授業に参加したある学生からの感想を紹介します。

ある学生からの感想

同じコミュニティ福祉学部の学生が私自身も関心のあるまちづくりについて研究をしている姿を見て非常に良い刺激となりました。Kさんの発表のなかで外部組織とまちの住民との間で食い違いが起きていることが触れていましたが、私はこの解決に「まちづくりラウンドテーブル」という取り組みを参考にすることが良いのではないかと考えます。「まちづくりラウンドテーブル」においては、住民の意見を出し合ってもらい、その妥当性を専門家たちで検証し、まちづくりが進められていきます。つまり、住民の意見を主として、専門家たちで補助する方が、「住み続けられるまちづくり」や「つくる責任、使う責任」に対してより良いかたちでアプローチできるのではないかと考えます。

Nさんの「知ることによってなんとなく怖いなくなる」というご意見は非常に示唆的であると感じました。様々な偏見の根本には人々の無知が潜んでいると考えます。一方で、世の中には「知る」という機会が何らかの原因で奪われている方々もいます。それは貧困であったり、学習障害であったり、DV等の要因で情報に触れる機会がなかったりと非常に複雑な背景があると思われますが、そういった人たちにどうやって知識を、あるいは人の思いを伝えていくかが問われていると考えます。

また、Fさんのお話ししてくださった「公正な移行」についてもSDGsの目標達成に当たって深く検討していかなければならないと感じました。特に、デジタル化が進むことでついて行けなくなる人々、社会の在り方が変わる中で仕事を失う人々をどうカバーするか、あるいはそもそも生み出さないようにするかが重要であると考えます。これについて十分な検討がなされずSDGsという「名」ばかりが推進されていくのならば、それはSDGsの推進によって「排除されない立場」の人による自己満足に終わりがねないと考えます。ただし高齢者などを「テクノロジー」についていけないと最初から見なすのも新たな排除の原因となると考えます。コロナ禍において人と会うことが制限されるなか、Zoomなどをうまく使ってサークル活動を継続しているような高齢者の方も珍しくありません。人は、新しいものに対しある程度順応していく力を秘めていると考えます。SDGsのような取り組みも、いつか社会の当たり前となっていく可能性も秘めていると考えます。

また、ブレイクアウトのなかで非常に興味深いご意見がありました。RSSCの世代の方は、かつてから皆さんなりに環境問題に対してそれなりに考え、行動を起こしてきたそうです。しかし、現状では彼らが何もしてこなかったように扱われていることを嘆いていました。何もしてこなかったのだと見なし、かつて第一線で様々な問題に関わっていた人を切り捨てるのではなく、共に、かつては何が足りなかったのか、今の若い

世代が生み出した技術やモノを上世代ならどう生かせるかについて検討していく、多世代協働が積極的に行われていくことが重要だと感じました。その点、今の社会に求められているのは、人とのつながりを再び盛んにし、多世代間で忌憚のない意見をぶつけ合える雰囲気を作り出していくことだと考えます。違う世代からのご意見を聞くことができ、非常に勉強になりました。また、SDGsが流行することにより、「SDGsと口にしていればそれでOK」という風潮が生まれることを危惧している方もいらっしゃいました。Yさんの「グリーンウォッシング」とも関連すると思いますが、まさにSDGsの形骸化については危険視をしなければいけないと考えます。

いかがでしょうか。私はこの感想を読んでとても嬉しくなりました。本学には素晴らしい学生がいることをあらためて実感できたからです。この学生以外にも、「私もこういう取り組みをしています」、「私はこの点についてゼミで学びを深めています」、「グループワークを通じてこういうことを考えました」などの声が数多く寄せられ、私自身、様々な気づきを得ることができました。世代を超えて共に学ぶ「異世代共学」の重要性・可能性を再認識することができたのも、その一つです。

ここであらためて「SDGs×AI×経済×法」の概要を説明しておきたいと思います。この授業は、SDGsについて、「①ファクトを踏まえて現状を理解し、②ゴールを達成するためにどのような取り組みがなされているのかを学び、③自分に何ができるのかを考え、行動する力を育むこと」を目標としており、とりわけSDGsと技術・経済・法との関係を学問横断的に学べるよう授業計画を組みました。幸いなことに、持続可能な開発のための教育（ESD）の第1人者である阿部治先生（本学名誉教授）のサポートを受けることができ、様々な領域で活躍されているゲスト・スピーカーの先生方を14名もお招きすることができました（詳細はシラバスをご覧ください）。ゲスト・スピーカーの先生方には、学生の知的好奇心を揺さぶるような魅力的な話をしていただいただけでなく、チャット等を通じた質問や意見にも授業中さらには授業後も含めて非常に熱心に答えていただきました。ゲスト・スピーカーの先生方のお話は、私にとっても参考になることが多く、この授業は私にとっても学びの場となっていました。授業に参加して下さった先生方に心より御礼申し上げます。なお、この授業ではチャット等で多くの質問や意見が寄せられましたが、これは、RSSC受講生が積極的に質問等をされたので、学部生も質問等をしやすい環境が形成されたためではないかと思っています。また、RSSC受講生を人数制限なく総合系科目で受け入れるために、この授業はRSSCから全カリに提供するという位置付けになっています。次年度も「SDGs×AI×経済×法」を開講する予定ですが、さらに良い授業となるよう努力を続ける所存です。

最後になりますが、この授業を運営するにあたっては全カリ事務室の皆さんにご尽力いただきました。本授業に関わっていただいたすべての方に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

追記

RSSCは、他大学でよく見られる社会人向けの公開講座とは一味違う学びの場です。「ゼミナール・修了論文」などの必修科目もあります。関心のある方はRSSCおよびRSSC同窓会のホームページをご覧くださいけると幸いです。

▷「SDGs×AI×経済×法」シラバス



[https://sy.rikkyo.ac.jp/timetable/slbssbdr.do?value\(risyunen\)=2021&value\(semekikn\)=1&value\(kougicd\)=FU871&value\(crclumcd\)](https://sy.rikkyo.ac.jp/timetable/slbssbdr.do?value(risyunen)=2021&value(semekikn)=1&value(kougicd)=FU871&value(crclumcd))

▷立教セカンドステージ大学



<https://rssc.rikkyo.ac.jp/>

▷立教セカンドステージ大学同窓会



<https://rssc-dsk.net/>

2021年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2021年11月現在

全カリ委員会				
役職名	氏 名	所 属		
部 長	井川 充雄	社	メ社	
副 部 長	飯島 寛之	済	会	
チー ム リー ダー	松本 句子	外C		言語チーム
	後藤 雅知	文	史	総合チーム
運営センター 委員	河野 哲也	文	教	文学部長
	藤原 新	済	済	経済学部長
	枝元 一之	理	化	理学部長
	水上 徹男	社	現文	社会学部長
	小川 有美	法	政	法学部長
	小野 良平	観	観	観光学部長
	沼澤 秀雄	福	ス	コミュニティ福祉学部長
	山口 和範	営	営	経営学部長
	塚本 伸一	現	心	現代心理学部長
	濱崎 桂子	異	異	異文化コミュニケーション学部長
	新多 了	外C		外国語教育研究センター長
	神橋 一彦	法	法	教務部長

言語教育研究室				
研究室名		氏 名	所 属	
英 語	主任	三浦 愛香	外C	
		山本 有香	外C	
		新多 了	外C	
		三島 雅一	外C	
		シュロスブリー美樹	外C	
		サンブソンリチャード J.	外C	
		マッキロイ タラ	外C	
		マーティン ロン R.	異	異
		小山 亘	異	異
		山口 まり子	異	異
ドイツ語	主任	坂本 真一	外C	
		新野 守広	異	異
		濱崎 桂子	異	異
	フランス語	主任	関 未玲	外C
		石川 文也	異	異
		小倉 和子	異	異
	スペイン語	主任	松本 句子	外C
		飯島 みどり	異	異
		佐藤 邦彦	異	異
中国語	主任	森平 崇文	外C	
		細井 尚子	異	異
朝鮮語	主任	佐々木 正徳	外C	
		イ ヒャンジン※1	異	異
諸言語	主任	関 未玲※2	外C	

総合系科目構想・運営チーム				
役職名	氏 名	所 属		担 当
リーダー	後藤 雅知	文	史	
メンバー	上田 信	文	史	人文学
	眞島 恵介	理	生	自然科学
	關 智一	済	会	社会科学
	前田 泰樹	社	社	社会科学
	石渡 貴之	福	ス	スポーツ人間科学

全カリサポーター				
	氏 名	所 属		グループ※3
学部選出	和田 悠	文	教	人文学
	佐々木 隆治	済	済	社会科学
	花井 亮	理	生	自然科学
	高木 恒一	社	現文	社会科学
	竹中 千春	法	政	社会科学
	大橋 健一	観	交	社会科学
	原田 峻	福	コ政	社会科学
	秋野 晶二	営	営	社会科学
	山田 哲子	現	心	人文学
	奥野 克巳	異	異	人文学
総長任命	田島 夏与	済	政	社会科学
	安松 幹展	福	ス	スポーツ人間科学

※3 サポートグループ / 人文学系サポートグループ
社会科学系サポートグループ
自然科学系サポートグループ
スポーツ人間科学系サポートグループ

言語系科目構想・運営チーム				
役職名	氏 名	所 属	担 当	
リーダー	松本 句子	外国語教育研究センター		
メンバー	三浦 愛香		英語	
	坂本 真一		ドイツ語	
	関 未玲		フランス語 / 諸言語	
	松本 句子		スペイン語	
	森平 崇文		中国語	
	佐々木 正徳		朝鮮語	

※1 秋学期より研究休暇
※2 フランス語研究室主任との兼務

※1 秋学期より研究休暇

※2 フランス語研究室主任との兼務

全カリニュースレター No.51

発行 2021.11.19

発行人 井川 充雄

編集人 松本 句子、眞島 恵介

発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター